九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

認識を表す動詞knowの補文構文と二人称主語に関する考察

中島, 千春
福岡女学院大学国際キャリア学部

https://doi.org/10.15017/1518726

出版情報：九州大学言語学論集. 35, pp.287-299, 2015. 九州大学大学院人文科学研究院言語学研究室
バージョン：
権利関係：

KYUSHU UNIVERSITY

認識を表す動詞 know の補文構文と二人称主語に関する考察

中島　千春
（福岡女学院大学国際キャリア学部）
c_nakashima@fukujo.ac.jp

キーワード：**know、叙実動詞、Verhagen、間主観性**

０．　はじめに

本稿では認識を表す動詞 know がその主語として二人称 you を取る場合について考察する。動詞 know は叙実動詞の１つとされ、通常その補文の命題は前提となり、従って主節が否定されても命題内容は否定されずに事実として提示される(Kiparsky and Kiparsky 1970)。よって、例えば次の(1)では、主節は否定されているが命題 beer prevents cancer の方は否定されず、事実として提示される。

(1) Eric doesn't know that beer prevents cancer.

また、次の(2)は、主節の主語が二人称 you の場合であるが、ここでは上の(1)と同様、主節が否定されても、補文の命題内容、つまり「話し手が様々な大会のためのコスチューム作りに多くの時間を費やす」は事実として提示される。つまり叙実性が保たれている。

(2) *You don't know that* I spend large amounts of my free time working on costumes for various conventions…
(http://poniesforparents.tumblr.com/post/85035719264/you-dont-know-me)

一方、次の(3ab)では同じく二人称 you を主語とする補文構文であるが、(2)とは異なり、命題における叙実性が認められない[1]。

---

[1] 一般的に、話し手が事実だと確信していない内容を伝える場合、または一人称･現在の否定文では whether (if) 節を用い、that 節を用いるのは略式とされる。しかしながらインフォーマントによれば、that 節を用いた場合と whether（if）節を用いた場合とでは、フォーマリティ以外にも、僅かではあるが違いが感じられるとのことである。例えば、(3a)で that の代わりに if を用いて、"… it's a good idea to have more than one

(3) a. … it's a good idea to have more than one executor because *you don't know that* your executor is going to survive you. (BNCC)

b. … Thus, you cannot be a "strong" atheist - *you don't know that* God doesn't exist. (http://www.allaboutphilosophy.org/atheism.htm)

まず(3a)では、話し手は「遺言執行者が２人以上いるべきだ」と言っているが、その主張の根拠は、because が導く従属節の内容「遺言執行者が聞き手よりも長生きするかは不明」という判断にある。つまり your executor is going to survive you という命題は、ここでは事実との前提ではないのである。また(3b)においても、「神が存在しない」の真偽は不明なので、従って我々は無神論を強く主張することはできないと言っているわけである。よって、ここでも God doesn't exist という命題は事実との前提ではない。

このように、「you don't know that＋命題」という同一の形式であっても、(2)では補文の命題内容が事実として提示され、他方(3ab)では補文の命題内容は事実として提示されない。つまり、「you don't know that＋命題」には、命題の叙実性が保持される場合とそうでない場合があるということになる。本稿では(2)のような例を「タイプ A」、(3ab)のような例を「タイプ B」と呼ぶことにする。

「you don't know that ＋命題」

	叙実性の有無	例文
タイプ A	有り	(2)
タイプ B	無し	(3a)(3b)

この２つのタイプの「you don't know that＋命題」における叙実性の違いは何に起因するのか？同じ形式でありながら、主節が否定されても命題は否定されずに事実との前提であるタイプ A と、主節も命題もどちらも否定されるタイプ B とでは、話し手の認知プロセスにおいてどのような違いがあるのか。本稿では、このことについて考えてみたい。

まず第１節では Langacker の Control Cycle モデルにおける動詞 know の叙実

---

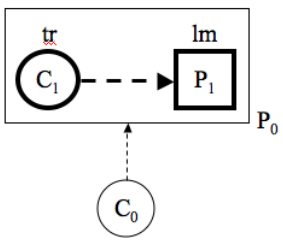
executor because *you don't know* if your executor is going to survive you."とした場合には、聞き手が命題内容を事実として受け止めているかどうかについて、話し手は中立的な立場で発言しているが、(3a)のように that が使われる場合には、話し手はどちらかと言えば、「聞き手が命題内容を事実と考えている」と想定しているように感じられるのである。

性についての説明を概観し、問題点を指摘する。次に第２節では Verhagen の把握構図を概観した上で、第 3 節において、二人称を主語とする補文構文について Verhagen の間主観性という観点からの分析を試みる。

１．　Langacker (2002, 2009)

1.1 objective layer と subjective layer

Langacker は認識を表す動詞 know における叙実性に関して、概念化に関わる２つの層を仮定することによって説明が可能となると考える。まず、１つ目の層の概念化を担うのは話し手(Co)であり、この層は subjective layer と呼ばれる。２つ目の層では、概念化者(C_1)は主節の主語であり、こちらは objective layer と呼ばれる。objective layer での C_1 は同時に、話し手(Co)の概念化の対象としての役割も果たす(2002: 203)。



C_1: 文主語、objective layer における概念化者
C_0: 話し手、subjective layer における概念化者
P_1: 従属節の命題、C1 が概念化をおこなう命題
P_0: Co が概念化をおこなう（或はおこなわない）命題全体

（図１） objective layer と subjective layer

(Langacker 2002:203)

Langacker は、この概念化における２つの層を、彼が提唱する Control Cycle の枠組みの中に組み込むことにより、動詞 know の叙実性について説明が可能となると考える。次の(4) はどちらも認識を表す動詞の用例であるが、(a)の believe の場合には叙実性が認められず、(b)の know の場合には叙実性が認められる。この believe と know における叙実性の違いについて、Langacker は図２を用いて、次のように説明する。

(4)

a. Eric believes that beer prevents cancer.

b. Eric knows that beer prevents cancer.　　(Langacker 2002: 203)

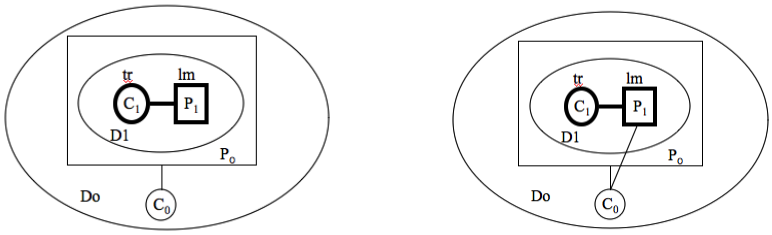


図２

(a) 動詞 believe の場合　　(b) 動詞 know の場合

(Langacker 2002: 204)

まず、動詞 believe では図２(a)のように、Eric の認識のあり方が概念化の対象であるから、Eric (C_1) が命題 beer prevents cancer (P_1)を現実の一部として受け入れていることがオンステージ（内側の楕円）にあり、プロファイルされる。一方、認知の主体である話し手 (C_0)もまた Eric の認識のあり方を捉えているが、こちらは概念化の対象ではなく、従ってオフステージ（外側の楕円内）に留まり、含意はされるが明示的に言語化はされない (Langacker 2002: 203)。

一方、(4b)の叙実動詞 know の場合であるが、まず認知の主体である話し手 (C_0)は、オフステージにおいて Eric の認識のあり方を捉えており、これは believe の時と同様、C_o と P_o を結ぶ線によって表される。更に、動詞 know の場合には believe の場合と異なり、Co と P1 とを直接結ぶ線が存在し、この線は話し手(C_o)が、beer prevents cancer という命題(P_1)そのものについて、エリックの認識からは独立して、現実として捉えているということを表す。このことより、動詞 know の場合には、主節が否定されたとしても命題そのものは否定されないと説明される(Langacker 2002: 204)。

1.2 叙実性と二人称主語

本節では、Langacker のモデルの中で「you don't know that ＋命題」の２つのタイプ（タイプ A、タイプ B）がどのように説明されるかを見る。まずタイプ A における叙実性については、Langacker のモデルにおいて以下のような説明が可能である。

(5) *You don't know that* I spend large amounts of my free time working on

costumes for various conventions…. (=(2))

先に見た(4b)と同様、ここでも認知主体の話し手(Co)が命題 I spend large amounts of my free time working on costumes for various conventions を、文主語 you の認識からは独立して、現実として受け入れていると説明することができる。つまり、話し手と命題の間には直接繋がる線が存在しており、これは主節が否定されたとしてもそのままであり、従って叙実性は保たれていると考える。

ではタイプ B についてどうであろうか。(6ab)において叙実性が保持されないことは Langacker のモデルではどのように説明されるのだろうか。

(6) a. … it's a good idea to have more than one executor because *you don't know that* your executor is going to survive you. (= (3a))

b. … Thus, you cannot be a "strong" atheist - *you don't know that* God doesn't exist. (=(3b))

まず(6a)では、話し手は命題 your executor is going to survive you を現実の一部として受け入れてはいない。(だからこそ、遺産管理人を２人以上持つ必要があると主張している訳である。) このことは、Langacker の、「動詞 know の場合には Co と P1 を直接結ぶ線がある」という主張と矛盾するであろう。また、(6b)についても、話し手 Co と命題「神は存在しない」とを直接結ぶ線は存在しないことになり、やはり Langacker の主張とは相容れない。

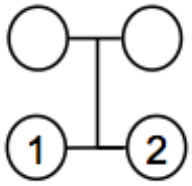
本節では、Langacker の Control Cycle のモデルの中でタイプ A についてはその叙実性が説明可能であるが、タイプ B については説明が不可能であることを見た。タイプ A と B 両方が説明可能となるような、より説明力のある考え方が求められる。次の２節では Verhagen の間主観性の理論と把握構図を概観し、第 3 節においては、Verhagen の考え方をもとに２つのタイプが説明可能となることを論じる。

2. Verhagen (2005, 2007)

2. 1 間主観性と把握構図

Verhagen は、ヒトのコミュニケーションにおいて、情報の交換は二義的であって第一義は他者（聞き手）の考えや行いに影響を与えることだと考える(2005:9-10)。話し手は発話を通して、聞き手と認知レベルでの深い遣り取り(deep cognitive interaction)を行い、それによって聞き手との共通基盤を増やしていくのであり、Verhagen はこれを間主観性 (intersubjectivity)と呼ぶ。従って、発話に

おいて話し手は（1）聞き手の心を読み、（2）概念化の対象に聞き手の共同注視を促し、（3）聞き手の概念化を調整していくものだと考える。これを図式化したものが図1の把握構図 (Construal Configuration)である (2005 :07, 2007 : 60)。



Level O: Object of conceptualization

Level S: Subject of conceptualization
(Ground)

（図 3）Verhagen の把握構図

グラウンドは認知主体1（話し手）と認知主体2（聞き手）の二人、そして二人が共有する知識から成る。この知識には、互いの世界観や文脈に関する知識が含まれる。また、発話とは、一般的には、話し手が、概念化の対象に共同注視するように聞き手に促し、その結果、二人の共通認識を更新していく（概念化の調整）ことであると考える。グラウンドからレベル O に向かって垂直に伸びる線が共同注視を表し、グラウンドの認知主体1と2の間の水平線が二人の概念化の調整を表わす。

2.2 段階的な主観性･客観性

Verhagen は言語表現とは、概念化の対象の特徴をグラウンドとの関わりで把握するものであるから、「最大限に客観的な」(maximally objective)表現と「最大限に主観的な」(maximally or highly subjective)表現とが存在し、その間は連続的に繋がっていると考える。従って、表現は一般的にその2つの極の間のどこかに位置すると考えられる（2007:61-62）。最大限に客観的な表現は図4(a)の把握構図のように表され、最大限に主観的な表現は図4(b)のように表される。

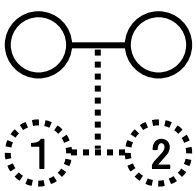
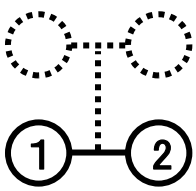


図 4

(a)
最大限に「客観的な」表現の把握構図：
レベル O のみがプロファイルされる



(b)
最大限に「主観的な」表現の把握構図：
グラウンドのみがプロファイルされる

3. Verhagen の把握構図と「you don’t know that＋命題」

ここでは２節で見た Verhagen の間主観性と把握構図を基に、「you don’t know that＋命題」 が叙実性を有する場合（タイプ A）とそうでない場合（タイプ B）の違いについて分析を試みる。その際、Verhagen による次の２つの考え方を基盤として議論を進める。

一点目は、認識を表す動詞が現在形であり、主語が一人称や二人称である場合、即ち I think や you know の場合というのは、「グラウンドにおける話し手や聞き手の概念化がプロファイルされている場合なのだ」という考え方である。従来は、例えば Langacker では、I know she left という文においては “I know”というプロセスは概念化の「対象」として objective layer においてプロファイルされると説明されてきた。即ち、主語 “I” は概念化の対象として見なされるということである。これに対して Verhagen は、幼児の言語習得の初期段階において、まず I think や you know が “epistemic marker, attention getter, or marker of illocutionary force”として現れることを指摘し(2007: 71)、それらの場合には、 “I think”や “you know”はグラウンドにおける話し手や聞き手の概念化がプロファイルされているのだと主張する。このことは図 5(a)のように表される。なお、言語習得において、後になってから従属節を伴った構文が現れるようになった場合には図 5(b)の把握構図になるとされる。

図 5

(a)
I think や you know の把握構図

(b)
「I think that＋命題」の把握構図

二点目は、文否定に関する議論である。Verhagen は否定文では相対する２つの観点が関わっていると考える。従って否定においてプロファイルされるのは、

概念化者である話し手と聞き手それぞれの相対する観点であり、そうすることによって話し手は、聞き手の観点を自分の観点に置き換えようとするのだと主張する(2007:　67)。話し手が聞き手の概念化の調整を行い、共通認識を増やそうとする把握構図は図６のように表される。

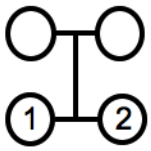
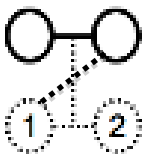


図６　　文否定の把握構図

以上の考え方に基づいて、本稿では次のような提案をおこなう。

「you don't know that＋命題」―　[タイプ A]

文主語の you は概念化の対象として、Level O においてプロファイルされ、図７のように表される。図４の把握構図に等しく、最大限に客観的な把握の仕方となる。なお叙実性については、Langacker の Control Cycle モデルと同様、概念化者１（話し手）と命題（把握構図では Level O の右側の円）とを直接結ぶ線があると仮定し、これによって命題が話し手によって現実として受け止められていることが含意されると考える。



Level O: Object of conceptualization

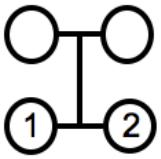
Level S: Subject of conceptualization (Ground)

図７　　タイプ A の把握構図

「you don't know that＋命題」―　[タイプ B]

グラウンドにおける話し手と聞き手二人の概念化者間の概念化の調整がプロファイルされる。即ち、認知主体１（話し手）は認知主体２（聞き手）が「遺産管理人が自分より長生きするだろう」という概念化を行っていると想定し、それに対して話し手自身の概念化（「遺産管理人は聞き手よりも長生きしない」という命題）に共同注視させることによって二人の共通認識としようとしてい

る。従ってタイプ B では、二人の認知主体のそれぞれの観点、認知の対象がプロファイルされ、図８のように全ての部分が太線で示される。



Level O: Object of conceptualization

Level S: Subject of conceptualization (Ground)

図８

タイプ B の把握構図

4.まとめ

本稿では動詞 know の補文構文において、主節の主語が二人称 you である場合、その否定文において叙実性が保持される「タイプ A」と、叙実性が保持されない「タイプ B」があることを指摘し、それぞれにおける認知プロセスの違いについて考察した。まず 1 節では Langacker の Control Cycle モデルにおいて概念化の２つの層､即ち objective layer と subjective layer を仮定することにより、三人称主語の場合や、或は二人称主語であってもタイプ A の場合には、その叙実性について説明可能となることを見た。一方で、タイプ B については、その叙実性が失われることを Control Cycle モデルでは説明できないことを見た。２節では、Verhagen の把握構図を概観し、続く 3 節では、彼の間主観性理論と把握構図に基づくことで、「you don’t know that＋命題」の AB 両方のタイプの違いについて説明が可能となることを論じた。即ち、タイプ A とは最大限に客観的な把握の仕方であり、文主語 you は概念化の対象として objective layer 上でプロファイルされている場合である。つまり話し手は、聞き手（文主語 you で表される）が命題を知らないことを「客観的な事実」として叙述しているわけである。またこの場合、話し手は命題に直接的にアクセスしており、従って叙実性が保たれていると考える。一方タイプ B の「you don’t know that ＋命題」とは、話し手と聞き手の概念化の調整が関わる場合であると考えられる。即ち、話し手は「聞き手が自らとは異なる観点を持つ」という読みを行った上で、互いが共通の認識となるように概念化の調整を行うのである。そのようなグラウンドにおける話し手と聞き手のインタラクションがプロファイルされて言語化されるのが、このタイプ B の「you don’t know that＋命題」なのである。

参考文献

Diessel, Holger, and Tomasello, Michael (2001) The acquisition of finite complement clauses in English: a corpus-based analysis. *Cognitive Linguistics* 12: 97-141.

Kiparsky, Paul, and Kiparsky, Carol (1970) Fact. In Manfred Bierwisch and Karl Erich Heidolph (eds.), *Progress in Linguistics*: 143-173. The Hague: Mouton.

Langacker, Ronald W. (1987*) Foundation of Cognitive Grammar.* Vol. 1, Theoretical Prerequisites. Stanford, CA: Stanford University Press.

Langacker, Ronald W. (1990) Subjectification. *Cognitive Linguistics* 1: 5-38.

Langacker, Ronald W. (2002) The Control Cycle: Why Grammar is a Matter of Life and Death. *Proceedings of the Annual Meeting of the Japanese Cognitive Linguistics Association* 2: 193-220.

Langacker, Ronald W. (2008) *Cognitive Grammar: A Basic Introduction.* New York: Oxford University Press.

Langacker, Ronald W. (2009) *Investigations in Cognitive Grammar*. Berlin: Mouton de Gruyter.

Nakashima, Chiharu (2011) The Cognitive Verb Know, Referring Expressions, and Intersubjectivity. Paper presented at 11th International Cognitive Linguistics Conference, Xi'an.

Nakashima, Chiharu (2011) Why Is *You Don't Know That* Different from *You Don't Know It*?: Reanalyzing Anaphoric Expressions from an Intersubjective View. *Kyushu University Papers in Linguistics (Memorial Number for the late Professor Emeritus Isaku MATSUDA)* 32: 229-248.

Thompson, Sandra A. (2002) 'Object complements' and conversation: towards a realistic account. *Studies in Language* 26:125-164.

Tomassello, Michael (1999) *The Cultural Origins of Human Cognition*. Cambridge, Mass./London: Harvard University Press.

Verhagen, Arie. (2005) *Constructions of Intersubjectivity: Discourse, Syntax, and Cognition*. Oxford: Oxford University Press.

Verhagen, Arie. (2007) Construal and Perspectivization. In Dirk Geeraerts and Hubert Cuychens ed. *The Oxford Handbook of Cognitive Linguistics*. Oxford: Oxford University Press.

池上嘉彦　(2003)「言語に置ける＜主観性＞と＜主観性＞の言語的指標(1)」. 山梨正明他（編）『認知言語学論考』No.3. 東京：研究社.

河上誓作　(1996)（編著）『認知言語学の基礎』東京：研究社.

中島千春　(2009)「認識を表す動詞 know と指示表現」『主観性ワークショップ』（金沢大学）口頭発表.

中島千春（2011）「間主観性(intersubjectivity)に関する二つの理論の検討：Verhagen(2007)と Langacker(2008)」『福岡女学院大学短期大学部英語英文学紀要』48: 7-24.
中村芳久　(2010) 「否定と（間）主観性 : 認知文法における否定」. 加藤泰彦、吉村あき子、今仁生美（編）『否定と言語理論』東京：開拓社.
野村益寛　(2010) 「認知文法における主観性構図の検討」『日本英語学会第２９回大会シンポジウム：（間）主観性の諸相』
本多啓 (2006) 「認知意味論，コミュニケーション， 共同注意–捉え方（理解）の意味論から見せ方（提示）の意味論へ」『語用論研究』8: 1-13.
本多啓 (2010) 「共同注意と間主観性」. 澤田治美 (編)『ひつじ意味論講座 5 主観性と主体性』 127-148, 東京：ひつじ書房.

コーパス

BNC: *British National Corpus*

Complement Clause with the Verb Know: Verhagen's Construal Configuration and the Subject *You*

Chiharu Nakashima
(Fukuoka Jo Gakuin University)

This paper examines the cases where complement clauses with the verb *know* have *you* as their subject. With the verb *know*, which is one of the factive predicates, truth of complements is generally presupposed and therefore even when the main clauses are negated the complements are not (Kiparsky and Kiparsky 1970). However, with cases where the subject is *you,* we claim that two clearly distinct types are observed: the one in which the factivity is kept intact as in (1), and the other in which the factivity has been completely lost as in (2).

(1) *You don't know that* I spend large amounts of my free time working on costumes for various conventions….

(2) … Thus, you cannot be a "strong" atheist - *you don't know that* God doesn't exist.

In this paper, calling the former "type A" and the latter "type B", we explicate each type based on Verhagen's theory of intersubjectivity (2005, 2007) and the construal configuration. That is, we claim that type A is the cases where the expressions are maximally "objective"; type B, on the other hand, is the cases that profile the coordination relation between the speaker and the hearer, with respect to the same object of conceptualization.